

平成19年 11月4日（日）

みなとまちづくり生涯学習講座
シリーズ 海港都市「神戸」を語るPart2〔第2回〕

「室町幕府のアジア外交と兵庫津 ―足利義満の日明貿易―」

天理大学国際文化学部教授

ふじたあきよし
藤田明良氏

<プロフィール>

1959年新潟県上越市生まれ。名古屋大学文学部卒業後、神戸大学大学院文学研究科で日本中世史、東アジア海域史を専攻とし、修士課程と博士課程を修了。1998年からは天理大学助教授となり、2005年から現職。阪神・淡路大震災後の歴史資料保全活動にも関わる。



今日は中世の神戸の港、兵庫津についてお話します。中世の兵庫津というと皆さんは平清盛を思い浮かべるのではないのでしょうか。もちろん清盛は兵庫のみなとの発展に多大な貢献をしましたが、今回は忘れられがちな功労者、室町時代の足利義満の話をします。義満と言えば京都の金閣寺が有名ですが、近年、金閣寺は中国の外交使節を迎え入れるための迎賓館であったという説も出ています。すなわち、義満の時代は、近隣のアジアの国々と正面から向き合って真剣に外交を行なおう



とした時代なのです。

まず、当時の東アジアの国王外交についてご説明いたします。室町幕府の成立とほぼ並行して、中国ではモンゴル民族が立てた元が滅び、漢民族による明という国が成立します。この明の成立が、当時のアジアの国際関係に大きなインパクトを与えることになります。

明以前の元や宋の頃は、基本的に外交と貿易は別だというのが中国の考えでした。つまり、きちんとした外交関係はなくても、貿易という経済交流は可能だったのです。例えば日宋貿易を行った清盛の時代も、日本と宋との間に朝廷や政府による国交があったわけではありません。にもかかわらず、毎年たくさんの貿易船が東シナ海を往来していました。また、元と日本とはいわゆる蒙古襲来・元寇がありましたが、戦争が一旦終わりさえすれば、経済交流・貿易は復活しました。つまり、この頃までは中国の政府も外交をあまりきちんと考えてはいませんでした。

しかし、明は外交を内政と並ぶ国の柱だと考え、外交と貿易を一致させたのです。具体的に言うと、まず自国の商人に対しては勝手に海外へ商売に行ってはいけないという海禁政策をとります。これは江戸時代の鎖国と同じような政策です。そして外国に対しては皇帝への朝貢を求めました。朝貢とは貢物を持って皇帝に挨拶に行くことですが、それを行った者に対して冊封、つまり正式な文書で国王として任命し、手続きを済ませた国とだけ貿易を行うという政策をとりました。

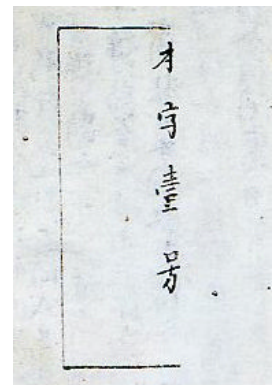
そして日本では、室町幕府の将軍職を息子に譲って出家した足利義満が明から国王に任命され、この朝貢貿易を始めます。

当然、最初に朝貢を行う時はまだ国王に任命されていませんから、「日本准三后源道義」という名で1401年に義満は遣明使を送りました。「准三后」とは皇后・皇太后など3人の後に次ぐという名誉号、「源道義」とは義満



出家後の名前です。そして彼は翌年、明の皇帝から日本国王に正式に任命され、「印爾」という日本国王の印をもらいます。それから、明で使用されていた暦である「大明暦」と、日本国王が派遣した正式

な船であることを証明する「勘合」を与えられます。



ところが、明が最初に日本国王に任命したのは義満ではないのです。実は、南北朝内乱

の時に室町幕府と敵対した南朝の人物が、最初に日本国王として任命されています。

1368年、洪武帝は明を建国すると、すぐに周辺諸国に使者を出します。日本に送った最初の使者は途中で倭寇か何かに襲われて死んでしまい、2回目の使者も九州にたどり着きますが、招諭に失敗して帰国します。1370年の3回目の使者が、九州の太宰府にいた日本政府の責任者の説得に成功します。そして翌年、日本の使者は洪武帝の使者と一緒に中国に向かいます。この使者を出したのが、後醍醐天皇の皇子であった懐良親王^{かねよし}でした。この人は洪武帝に対し、倭寇が捕虜とした明の中国人70名と使者を明に遣わし、「日本国王良懷」と冊封されています。

しかしその後、南朝は勢力を後退させていきます。1372年に4度目の洪武帝の使者が博多に上陸した時には、ここは北朝側が押さえていて、使者らは拘留されてしまいます。その後、中国の使者は京都に行き、当時將軍になったばかりの15歳の義満と面会します。義満は考えた末、翌年に使者を中国に派遣し、自分が日本国王の称号をもらうことにしました。この時、倭寇に捕まった中国人など150名を送還し、また留学を希望する日本のお坊さん71名を同行させています。

ところが洪武帝は「天皇の臣下にしか過ぎないのに皇帝とよしみを通じたいというのは不遜である」と、義満の手紙を返還しました。日本国王はあくまで最初に任命した懐良親王であると洪武帝は考えていたのです。

その後、日明の外交関係は一時断絶します。洪武帝の周りでクーデターが計画されたためです。洪武帝はその首謀者を謀反の罪で断罪しますが、翌年、クーデター派の人物が密かに日本に渡り、日本人の武士400名をクーデターの参加人員として中国に入国させようとしたことが明るみに出ました。日本はクーデターに加担したとして「日本国王良懷」の使者も入朝を許されなくなりました。以来、洪武帝は対日姿勢を硬くし、結局20年ぐらい外交関係は途絶えたのです。

1398年、洪武帝が亡くなり、孫の建文帝が即位しました。ところが、この建文帝の叔父にあたる燕王、後の永楽帝ですが、彼は自分の方が皇帝にふさわしいと北京で反乱を起こし、3年ほど不安定な状況が続きます。その間に義満は明に使者を送り、建文帝から入朝を許され、翌年日本国王に冊封されたのです。

建文帝は挙兵した燕王に対し、何とか自分の地位を守ろうとしていました。そのため、

自分のところにたくさん外国の使者が来ているのだと皇帝としての正統性を誇示したかったわけです。しかし、日本への使者を送った後に建文帝は帝位を追われ、結局、日本は永楽帝と外交関係を続けていくことになります。

さて、先ほど申しました通り、明は外交と貿易を一致させました。つまり、貿易を担うのは将軍が派遣する外交使節団になるわけです。では、使節団はどういう人たちが乗っていたのかをご紹介します。

まず、外交を実際におこなう「官員」という朝貢使節がいます。使節団の正副団長に当たる人物ですが、この官員には京都五山の禅宗寺院のお坊さんが任命されます。義満の時代の五山のお坊さんは中国の留学経験を持っていますから中国語ができますし、中国人は漢文の素養を重視しますから、外交団の代表にはうってつけだったわけです。



官員



それから随行者として、通訳を行う「通事」がいます。また、有力寺社や守護大名の代理人としてお坊さんや武将が任命される「居座」や「土官」も乗船します。

通事　また当然、船頭となる「^{かんど}舵取り」や乗務員の「^{かこ}水手」も乗船します。

さらに、そこに「客商」という商人が大勢、随行します。ただし、商人ならば誰でも行けるわけではありません。幕府に前もって参加料を納めなければならないのです。上納金には千貫文と五百貫文という2つのランクがあり、それぞれ「千貫衆」、「五百貫衆」と呼ばれます。



この貿易はどれだけ利益があったのでしょうか。貿易を主催できるのは最初にお話ししました通り、日本国王だけです。ただし、実際は守護大名や奈良の東大寺、京都の北野天満宮といった大きなお寺や神社は、国王が持っている勘合を分けてもらって主催者の仲間入りをするようなことが多かったようです。彼らのところには、商人からの上納金が確実に入ります。大体1艘あたりの上納金は1万貫です。

先ほどから「貫」という単位でお話させていただいておりますが、これは現代ではいくらになるのか。当時の米の値段や人夫の日給などを参考にしますと、1貫が約3万円くらいです。ですから、貿易船1艘につき、主催者には3億円の上納金が入ったわけです。

そうすると、貿易船1艘につき、貿易に参加した商人達の利益はどれくらいなのか。大体、上納金が全体の利益の半分あるいは3分の1程度とされています。つまり、貿易船1艘につき、彼らは全体として3億円から6億円の利益を手にしたのです。

では、日本はどんな品物を売っていたかというのと、国産では金、屏風、漆器、あと火薬の原料となる硫黄などです。他に東南アジア産の胡椒や染料に使う蘇木、防寒に使用する北海産のラッコの皮も明に持って行きました。



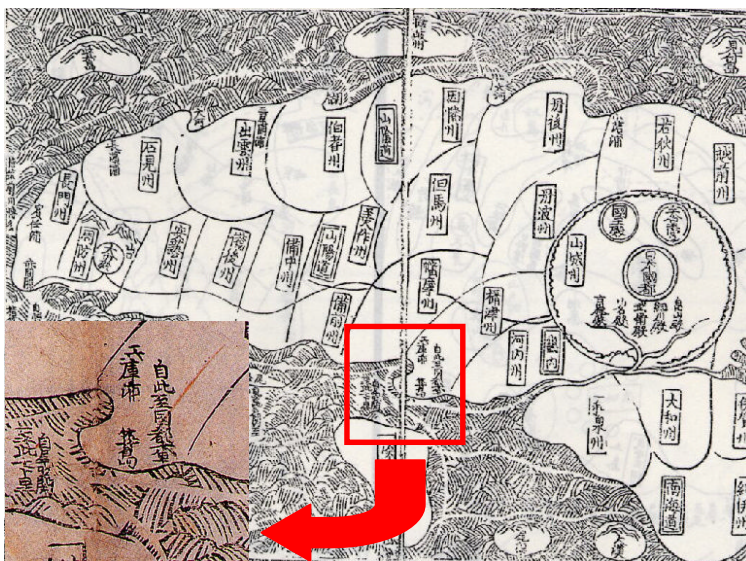
反対に中国から日本が買った物は絹織物、青磁、白磁といった磁器、そして銅銭、つまりお金です。室町時代、日本はかなり経済が発展していましたが、お金をつくってはいませんでした。すべて中国から銅銭を輸入していたわけです。

銅銭は一般の商人も買っていましたが、幕府がほぼ独占的に入手していました。なぜなら、やはり銅銭、お金は政府が発行するものですから自由に売り買いできません。ですから、中国の皇帝から日本国王がお願いして銅銭を分けてもらっていました。例えば1407年の記録では、20万貫の銅銭がこの年に日本に帰国した船に積まれていたそうです。それだけの金額を将軍がほぼ独占的に輸入していたわけですね。



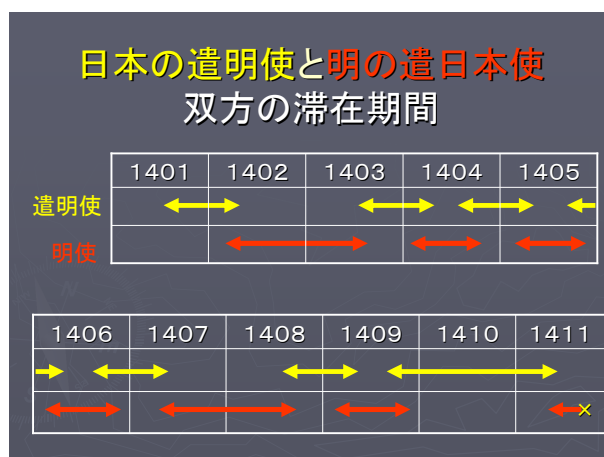
さて、ではいよいよ兵庫津とアジア外交との関係です。まず、当時の使節はどのように移動したかですが、中国から来る使節は、中国の都南京から寧波まで、運河を川船で移動

します。そこで外洋船に乗り換え、日本の福岡、博多へ向かいます。さらに瀬戸内海を通り兵庫に着岸、今度は陸路で京都に向かいます。途中、小さな船で淀川をある程度、遡ることもあります。このルートが基本です。使節の出迎えのため、義満は毎回、兵庫津まで下向しています。この他にも、朝鮮や琉球の使節も多くは兵庫津に入港しました。ですから、当時、中国や朝鮮・琉球などのアジア諸国では、兵庫津は日本国王直属のみなととして認識されておりました。



これは室町時代、朝鮮でつくられた「海東諸国記」という本についている当時の西日本の地図です。兵庫津は非常に大きく描かれています。拡大してみると、まずみなとの名前「兵庫浦」が書いてあります。そして、兵庫のランドマークである清盛がつくった「築島」。また、尾道からの距離と都の京都までの距離も書かれています。

義満が中国と外交を結んでから義満が亡くなるまでのおよそ10年間、それはまさに兵庫津にとって「黄金の日々」でした。毎年中国や韓国から外交使節団を乗せた船が兵庫津に入港し、それを義満が出迎えるということが繰り返されていました。



次の図をご覧ください。上の黄色い矢印が、日本が派遣した遣明使、下の赤い矢印が、中国が日本に派遣した中国の使節です。長さがそれぞれの国での滞在期間になります。

これを見ると、お互いの滞在期間にほとんど切れ目がありません。実は、東シナ海を横断する時は日本と明の使節は一緒に横断します。

つまり、日本の遣明使が日本に帰ってくる時は、明の使節が一緒にやってくるのです。また、明の使節が中国に帰る時には、日本の遣明使が一緒に行く。だから、東シナ海を毎年のように船が移動していたわけです。

では、どのくらいの人数が往来したのかについてですが、船の数では日本側・中国側、それぞれ6～7艘ですので双方合計で12～15艘と、かなりの大船団になります。その船1艘あたりにおよそ100人から150人が乗りますので、双方合わせて最低でも1,200名、最大2,000名を超える大使節団になります。それだけの人数が、東シナ海を移動して兵庫津に入港したのです。

中国の使節は、最終的に將軍のいる日本の都、京都に上ります。日本の使節も中国に行けば最後は南京に行くのですが、都に行ける使節は日中双方とも最大で300名です。つまり、使節団の中から選ばれた人だけが都に行くことになります。だから、中国の使節が300名京都に行ったら、残りの600～900名程度は兵庫で滞在します。

また、当時の船は季節風を利用して進む帆船です。北西の風で海が荒れる冬は、航海できなくなります。ですから、一度中国から日本に来たら半年間は帰ることができず、日本に滞在します。つまり、毎回1,000人近くの中国使節が神戸に滞在していたのです。

彼らは政府の使節であるため、幕府が彼らの世話を当たります。ただし、その費用を出すのは幕府だけではなく、全国の守護大名や全国に荘園を持っている荘園領主、つまり大きなお寺や神社に割り振って分担させました。

兵庫県の西に「矢野庄」という荘園がありますが、「東寺百合古文書」という古文書を見ると、中国から使節が来たらいろんな分担金を矢野庄が負担していたことが分かります。

使節が来れば、たくさんの荷物を運ぶことになりますが、唐船に対する贈り物を運ぶ人員の費用、それから、神戸に陸揚げされた中国の進物を京都まで運ぶ人員の費用、中国からの輸入品を扱う部署の責任者の食料代等に関するさまざまな人員の給料などです。見方を変えれば、このように当時の神戸にはたくさんの人・物・カネが集まっていたわけで、経済が大きく活性化した時期だったといえます。

さて、先ほど日本国王が大量の銅銭を輸入していると申し上げましたが、貿易が始まってから將軍直属の土蔵と呼ばれる施設、今でいえば日本銀行に例えられるかもしれませんが、それが兵庫津に置かれるようになりました。1406年、兵庫に將軍直属の土蔵をつくる計画がまとまり、その翌月には「北山殿ノ御倉」の「預」に「式阿弥」という人物が任命されたという記録が残っています。北山殿は金閣寺を含む豪邸を北山殿と呼んだことにちなむ義満の呼称で、彼の「御倉」、つまりこの兵庫土蔵の責任者が決定したのです。「式

阿弥」というのは本名ではありません。当時は公家・武士・商人など身分の上下がありますが、出家して「式阿弥」号を名乗ると、出身身分に関係なく将軍のもとで自由に動けるようになったのです。当時、将軍の周辺にはそういう、いわば将軍の手足として動いていた人達がいたのですが、彼らが兵庫の土蔵の責任者になり、永楽通宝などの中国の銅銭を日本に流通させる手配をしていたのです。言い換えれば、彼らは中国銭を運用する将軍お抱えの投資ファンドのような役割を果たしていました。

別の記録には兵庫に「庫御所」というのが出ており、これも義満の土蔵を指すと言われている。「御所」という呼称から、土蔵に付随して義満が兵庫に来た時に滞在する施設があったのではないかと考えられます。

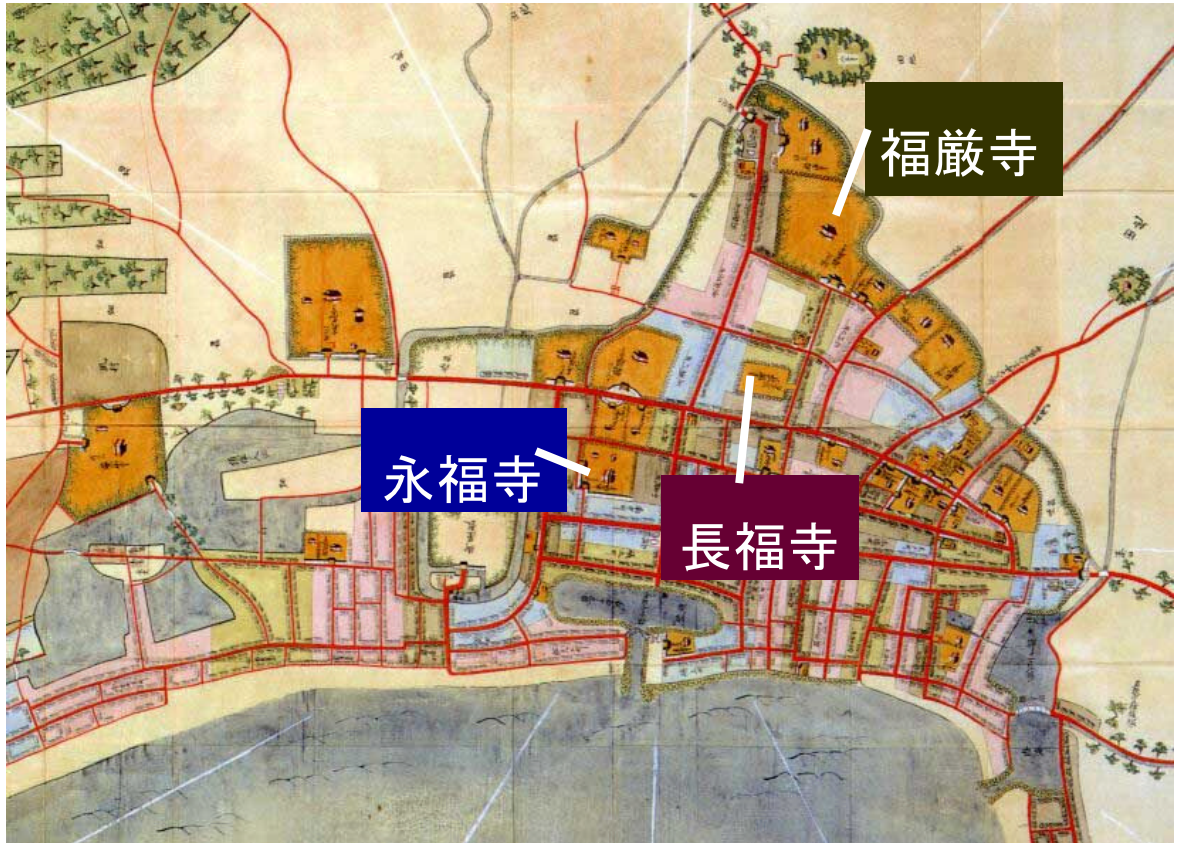
では、義満の庫御所、土蔵などはどこにあり、それはどんな広さでどんな建物だったのか。残念ながら、現在のところそれは分かりません。

しかし、明や朝鮮の使節が泊まった迎賓館に当たるところは今でも残っています。それが、お寺です。当時、外交使節が来ると禅宗のお寺が外交使節の宿泊所、迎賓館になりました。例えば、兵庫駅の近くに福厳寺という臨済宗の名刹がありますが、当時の記録には「世に唐人の館駅と為す」と書かれています。「館駅」というのは京都に行く途中の客館、つまり兵庫津の迎賓館だったわけです。また、1451年に中国に向かう日本の遣明使は永福寺というお寺に滞在したということが別の記録で分かります。

さらに、兵庫津で出発を待っていた朝鮮使節が、滞在中に長福寺というお寺を訪れて、寺の青い松が港の水面に映えるというような詩を読んでいます。もちろん当時の建物はもう残っていませんが、お寺そのものは今も残っていますので、当時のみなとの繁栄ぶりを知る、あるいは復元するヒントになると考えることもできます。

ところが、後世のお寺の場所から当時の迎賓館や宿泊施設の場所が分かるかというと、なかなかそうはいきません。江戸時代の兵庫絵図を見ると、長福寺は室町時代、みなとの水面に接していたはずですが、もう江戸時代には水面からかなり離れているのです。

これをどのように考えるか、2つ考え方があります。つまり、室町時代の兵庫は入り海がずっと入り込んでいたのが、江戸時代は埋め立てられたという考え方ですね。こういうお寺は高台となった自然堤防に立っていたと考えられます。もう一つは、中世にはお寺が海岸沿いにありましたが、近世の初め、兵庫のまちを整える際にお寺の位置を変えたという考え方ですね。どちらが正しいのか、それはまだ分かりません。



ということで、最後に、これから皆さんと一緒に考えていかなければいけない研究課題を私なりに挙げてみました。

一つは清盛の時代から300年近く経っていますし、明からの大型船も来ますから、義満の時代に兵庫津は、いろいろ改修工事もしているはずですよ。そうしたインフラ整備がどのようなものだったのか。そして、庫御所やお寺、土蔵などは当時の兵庫津のどこにあったのか。さらに、近世の初めに兵庫城や都賀堤がつくられた時、室町時代とどこが変わったのか。

こうした諸問題を明らかにするには、文献の研究だけでは限界があります。土木関係、建設関係、港湾関係、そういう人たちと共同で研究を進めなければなりません。

室町時代、兵庫津のライバル港であった大阪の堺や九州の博多では、埋蔵文化財や土木の関係者等が一体とな

って昔の地形を調査し、当時のみなとの姿が地図で分かるようになっています。





残念ながら、兵庫津はどこに何があったか分かっていませんので、こうした地図を描くことが出来ません。ですから、私はこれから皆さんと力を合わせて、中世の兵庫津の具体的な姿を復元できるよう共同研究を提案することで、本日の講演を締めくくりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。